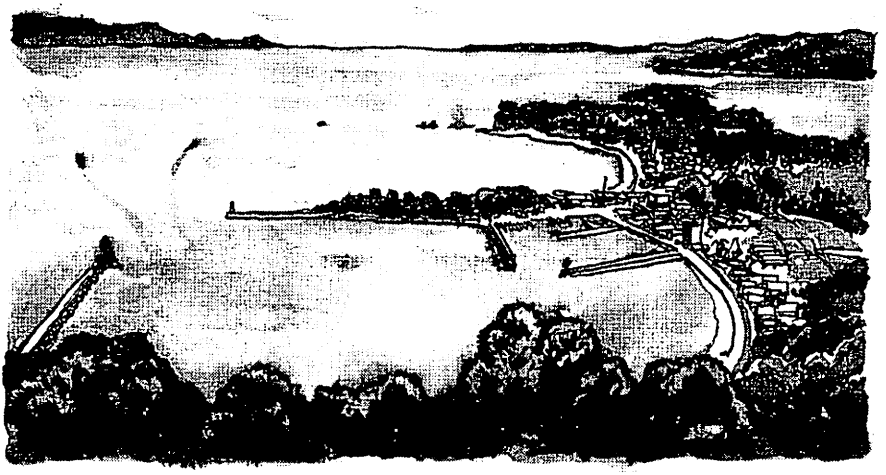

［自伝小説］

わが道を求めて（第五回）

人間をはぐくんでくれるもの

長崎　明
さしえ　竹内秀明

関東大震災にこだわる

日頃、老夫婦二人きりのわが家も、年末・年始や春・夏の休みには、子供たち、孫たちが集まってきて、賑やかになることがある。そんなとき、いっときの間だが「小間物屋、瀬戸物屋が関東大震災にあった時もかくや」と思われるほどの散らかり様を呈する。

二人きりの時だと、板の間にほんの小指の先ほどのちりが落ちていても、「ホレ、お父さんでしょう」といっておっかけ回すお母さん（家内、妻、ワイフ）も、四人の孫たちとあってはどうしようもない。もっとも

孫たちのいる間は、おじいちゃん、おばあちゃんになってしまうのだが……。

四人の内訳は、長男の子が十一才、八才、五才の三人、長女の子が九才の一人で、合わせて四人、揃ってみんな女の子ばかり。次男の子はまだおなかの中で、男か女か判らない。

「女の子だから散らかしようがおとなしいよ。男の子だったらこんなものじゃあない。ふすまだって、障子だって、たちまちだよ」

と、いつだったか、東京の大おばあちゃん（おばあちゃんのお母さん）から言われたのを思い出す。私自身も確か小学校の五年の時だったか、当時としてはまだ珍しかった目覚まし時計、例のベルが上に取り付けてある奴だが、それがどうしてセットした時間どおりに鳴るのか、不思議で不思議で仕様がなかったので、ある日、とうとうバラバラにしてしまったっけ。「自分でバラバラにしたんだから、自分で元に戻しなさい」と母に言われたが、どうしても出来なかった。その頃の少年雑誌に、眼の見えない少年が、独力、手さぐりで時計の分解、組立に習熟して時計修理屋さんになった話が載っていたっけ。

それから、こんなこともあった。台湾は夏の間蒸し暑いので籐椅子が良く使われている。あの籐がきれいに蜂の巣のように編まれているのにとりつかれた私は、自分で編んで見ようとしたがどうしても出来ない。これまた、母の留守を見計らって、ナイフで背もたれのところを一〇センチ四角ほど切り取ってバラしてみた。これはちょっと度が過ぎたので少しばかり叱られたのを覚えている。

こういう母だったから、部屋を散らかすくらいで叱られた記憶はほとんどない。

孫たちも新潟に来た時ぐらい、うんと散らかすが良い。こんなことで騒がしいのは結構なことだ。

孫たちがワァワァ、ギャアギャアやっている最中に、ふと我と我が幼児期に思いを馳せる瞬間がある。それにしても、こういう時にすぐ関東大震災が出て来るのは、やっぱり大正一二年（一九二三年）生まれの仕方のなさか。

私もこの十月で六五才になる。思うまい、言うまいと心掛けるが、新潟大学の停年は六五才の年度末、三月三一日だから、私もあとちょうど一年で大学を去ることになる。

安藤良雄編「近代日本経済史要覧」東京大学出版会、一九七五年初版に「一八五三年、ペリー浦賀に来港」

に始まって「一九七四年、田中首相の金脈問題化（一〇月）、田中首相辞任し、三木内閣発足（一二月）」に至る年表が付されている。この近代、約一二〇年のちょうど折返し点あたりに、私の生まれ年がある。そして関東大震災が起こった年でもある。その前年、一九二二年に日本共産党が結成された。だから同党は私より一年早く六五才になるわけで、盛んに「日本共産党六五周年」記念出版をＰＲしている。年表によると「日本共産党（非合法）結成（七月）」とある。〈非合法〉無理もない。その僅か五年前一九一七年の一一月にロシヤ革命が起こり、わが国でも、米騒動（一九一八）、市電スト、造船スト（一九一九）、わが国初のメーデー（一九二〇）、足尾銅山スト（一九二二）と続くのに対して、政府は「治安警察法改正（一九二二）」をもって応じている。泣く子も黙る治安維持法は一九二五年に公布されるが、その二年前に関東大震災に便乗して「治安維持ニ関スル緊急勅令（九月）」、「国民精神作興ニ関スル詔書（一一月）」が出された。こうした情勢下で、「一九二三年四月赤旗創刊、六月第一次共産党事件（幹部大量検挙）」、そして「一九二四年一月総同盟、現実主義への方向転換決議、三月新潟県木崎村小作争議」とある。

年号	一　般	経　済・社　会	国　外
1922（大11）	日本，21カ条中の一部放棄を声明（2月） 衆議院，各派共同提出の陸軍軍縮決議を可決（3月） 南保庁設置（3月） 治安警察法改正（婦人の政談集会参加解禁）（4月） 加藤（友）内閣成立（6月） 日本共産党（非合法）結成（7月） シベリア撤兵完了（10月） 革新倶楽部結成（11月）	堺・山川ら「前衛」創刊（1月） 石井定七商店破産事件おこる（2月） 全国水平社結成（3月） 独禁保護組合法公布（4月，施行は1926年7月） 日本農民組合結成（4月） 山川均「前衛」に「無産階級運動の方向転換」を発表（"山川イズム"）（8月） 日本経済連盟会設立（8月） 日本労働組合総連合創立大会（決裂，"アナ・ボル論争"激化）（9月） 西日本中心の中小銀行恐慌おこる（11月） 政府・日銀，金融界救済措置を実施（12月） この年，軍縮により造船業界不況（32年頃まで） 生糸輸出高最高を記録 労働争議激発	日中両国，山東問題に関する条約（ワシントン条約・日本軍撤退等）調印（2月） ワシントン会議で海軍軍縮条約9カ国条約調印（2月） 独・ソ，ラッパロ条約（4月） ムッソリーニ内閣成立（ファッシスト政権樹立）（10月） オスマン帝国滅亡（11月） ソビエト連邦正式成立（12月）
1923（大12）	反対運動にかんがみ政府，過激社会運動取締法案を撤回（1月） 普選運動高まる（2月～3月） 中国21カ条条約廃棄通告（日本拒否）（3月） 石井・ランシング協定廃棄（4月） 災変同志会（武藤山治ら）結成（4月） 陸・海軍それぞれ軍縮計画を発表（7月） 関東大震災おこる（9月1日） 第2次山本内閣成立（9月） 東京地方に戒厳令（9月） 治安維持に関する緊急勅令（9月） 「国民精神作興に関する詔書」発布（11月） 虎の門事件おこり，第2次山本内閣総辞職（12月）	野田醤油大争議（3月～4月） 「赤旗」創刊（4月） 災害都市計画「復興院」設置（4月） 北一輝「日本改造法案大綱」（5月） 第1次共産党事件（幹部大量検挙）（6月） 名古屋に銀行恐慌おこる（7月） 震災に乗じ軍隊・警察による社会運動家の殺害，一般民衆による朝鮮人殺害おこる（9月） 甘粕事件（9月） 支払延期令（9月1日より30日間のモラトリアム），暴利取締令，日銀震災手形割引損失補償令等公布施行（9月） 政府・日銀等による震災に伴う財界・産業界救済措置を実施（9～12月） 震災善後公債法（12月） 総同盟，"現実主義"への方向転換決議（1月） 農民労働組合連盟結成（3月） 新潟県木崎村小作争議（3月）	蔣，山川均ら「前衛」創刊（1月） ヒトラー，ミュンヘン一揆（11月） 孫文，ソ連共産党方針を決定（11月）
1924（大13）	清浦内閣成立（1月） 第2次護憲運動おこる 政友本党結成（1月） 共産党解党決議（2月）	総同盟，"現実主義"への方向転換決議（1月） 農民労働組合連盟結成（3月） 新潟県木崎村小作争議（3月）	レーニン死去（1月） イギリス，第1次マクドナルド内閣成

関東大震災はほぼ六〇年周期で起こるとの説がある。近代科学の粋を集めて地震予知に取組むのは無理もない。今の東京の過熱ぶりは六五年前の比ではない。しかし、今、関東大震災が起こったらどうなるか。物質的損害に加えて、政治的意図にもとづく社会構造的破壊が起こらないとは限らない。そんな馬鹿な、と否定したい。

そこまで思いめぐらして、やっと現実に戻った。

初春の陽だまり、梅はほぼ満開、椿はちらほら。孫たちのワァワァ、ギャァギャァは庭に移ったが、まだ続いている。

台湾移住前夜

「おじいちゃん、何ぼんやりしているの」と妻。

「おじいちゃん、孫の子守りに疲れたのかしら」と長男の嫁。

長男はわが家の跡取り息子で、その長男の奥さんが、女偏に家で嫁になる。うまい呼び方がないものか。なまじっか民主主義を噛じっているだけに、根っからの旧人類のように「まさえ」、「みちこ」とは呼べないものだし、新人類のように、お互いに名前を呼び合うこともできない。妻が「おばあちゃん」で、長男の嫁が「お母さん」ということになる。

物干し竿に満艦飾のごとく洗濯物を掛け終わった「お母さん」が近付いてきて、

「ね、ね、おじいちゃんがうちの子くらいの時は、台湾で暮らしていたんでしょ。どうして台湾なんかに行ったのかしら」

「台湾て、沖縄のもっと向こうだよね」

と、さすが高学年の長男の長女（典子）。

「じゃあ、外国だね」

と、したり顔の長男の次女（葉子）。

「ふーん、遠いんだね」

と、感嘆する長女の長女（あゆみ）。

「かわいそうね」

と、判ったような長男の三女（麻子）。

そこへ長男（郁夫）が口を狭んで、

「かわいそうっていうのと少し違うね。おれたちだって、新潟のおじいちゃん、おばあちゃんと離れて、山形で暮らしているだろ。新潟のおじいちゃんは小さい時、お父さん、お母さんに連れられて、台湾に行ってたってことさ」

「そのお父さん、お母さんていうのは、今村松にい

る大おじいちゃん、大おばあちゃんのことなの」
と、おばあちゃんが解説する。
「でもさ、外国でしょ」
「その頃は、日本の国だったの」
「だって遠いところでしょ」
「台湾までどれくらいかかるのかしら」
「山形だと、新潟から三時間半くらいだけど」
「そうだな、神戸という港から船に乗って四日三晩かかった。神戸まで行くのに新潟から二日じゃあ無理だったんではないか。合わせて、約一週間てとこかな」
「じゃあ、やっぱし、かわいそうだったんだ」
「あんたたちのお父さんは山形の中学校の先生だけど、村松の大おじいちゃんは小学校の先生だったの。そしてね、お仕事の都合で台湾にお勤めしてたの。今からもう六五年も前のことだけどね」
「わたし、六五まで数えられるよ」
と、ちびっ子の麻子も話の仲間に入れて貰いたくて、くちばしを入れる。
「大おじいちゃんが小学校の先生、お父さんが中学校の先生、おじいちゃんが大学の先生、そしたら、誰れか高校の先生だと良かったのに」
「わたしのお母さん、保育園の先生だよ。康子先生ていうの」
「じゃあね、じゃあね、おばあちゃんも一緒に台湾に行ったの」
「馬鹿ね、おじいちゃんのちっちゃい時の事だから、まだ一緒に行けるわけないじゃないの」
「かわいそうにね」
電線にとまったつばめのように、縁先に並んだ孫たちが一斉にさえずり出すと、話が行ったり来たりする。
「そうだね、ちょうど良い機会だから、その頃のこと、聞かせてあげようか」

村松の大おじいちゃんのこと

まず、村松の大おじいちゃんのことだが、名前は武っていうの。典子は知ってるかな。生まれたのは明治三六年（一九〇三年）の一月だから、もう八五才なんだよね。麻子は八五まで数えられるかな。
小さい時から理科が大好きでね、一八才で昔の村松中学（今の村松高校）を卒業して、すぐに助手に採用して貰って、ゆくゆくは高校の先生になるつもりだったんだけど、希望をもって初出勤の日を待っている時に、

学校の宿直室から出火して、まだ出来たばっかりの理科実験室をはじめ校舎の大半が焼けてしまった。

「こわいね」、「かわいそうね」と、葉子と麻子が合いの手を入れる。話がはずむ。

さすがの大おじいちゃんもショックだったけど、くじけなかったんだね。急ごしらえのバラックの仮校舎で早速実験助手の仕事を始めたんだって。

焼跡の整理やら、新しく買って貰った実験器具の整理やらに、毎日忙しく働きながら、独学で小学校正教員の試験検定に合格したの。これはとても難しい試験で、合格できたのは何十人に一人という割合だったとか。

こうして、教員免許を取った大おじいちゃんは、一八才で曽野木小学校の代用教員に取り敢えず雇われ、その翌年の大正一一年（一九二二年）に村松小学校の訓導になって、再び村松の今の家で、大おじいちゃんの両親と暮らすことになった。

一九才になった大おじいちゃんは結婚しようと心に決めた。二〇才になると徴兵検査といって男はみんな兵隊になる義務があった。大おじいちゃんは中学生の時、大手術をしたので多分兵隊に採られないだろうと思ってはいたが、大おじいちゃんの心の中には、多分その頃から、早く結婚して親元から独立したいとの気持ちがあったのではないかな。

それに、実は、大おじいちゃんはかなり早い頃から大おばあちゃんが好きだったらしいね。つまり二人は恋愛してたらしい。大おじいちゃんから詳しく聞いてないから良く判らないというより、これは全くおじいちゃんの想像なんだけど、大おじいちゃんが大病をして入院してた医大病院（今の新潟大学医学部付属病院）に、同じ村松出身の大おばあちゃんが看護婦さんとして勤めていた、ということかも知れない。どういうきっかけで仲良くなったのか、それがまた全然判らない

けど、おじいちゃんが不思議に思うのは、長崎の家は身分の低い貧乏足軽といえども士族の家なの。ところが大おばあちゃんの山本の家は村松でも五本の指に数えられるくらいの山林地主さんだった。つまり財産はあるけど身分からいえば町人というか商人というか、平民に属していて、身分が違うわけね。

お前たち、まだ小さいから、身分が違うってどういうことか理解できないだろうが、今でも村松の新町、宝町、根木町のあたりは昔の家並が残っているし、町方は商人の家並だし、在郷（ザイゴ）になるとお百姓さんの家があって、それぞれ独特の風景が見られる。これは村松だけではなく、城下町だったところは大体似たり寄ったりになっている。

昔は風景（景観）どころではなく、風俗、習慣も違っていて、あっちの人とこっちの人とが恋愛したり、まして結婚したりなんて、とても難しいことだったに違いない。

「大おじいちゃんのご両親は反対しなかったのかしら」

と次女の康子が尋ねた。いつの間にか、孫たちよりも子どもたちの方が、熱心な聞き手に代わっていた。孫たちには少し難しいし、興味も湧かないらしく、下の二人はまた庭に出て、砂遊びを始めた。砂丘地南斜面の住宅地はどこを掘っても砂場になる。私は、子ども相手に話を続けることにした。

大おじいちゃんのお父さんのこと

そうなんだね。大おじいちゃんは長崎家の跡取りだから、そのまた両親が良く認めてくれたものだということになる。

大おじいちゃんのお父さん、つまり、ぼくのおじいさんは信吉という名前だけど、その時代としては随分進歩的な人だったらしいね。新津の中蒲原郡役所（当時）に書記として勤めていた頃、会津八一や桜井天壇と親交があり、自らを「浪外」、新婚早々の自宅を「浪外庵」と称し、句作にふけっていた。会津八一が新婚祝に、

にひ酒や　新津新妻　にひ館

なる句を贈っている。

浪外庵にたむろする若い俳人たちは、吟じては論じ合い、そして酌み交わし、雑魚寝もしばしばで、「木枯会」と名付けていたという。これは、村松で発刊されている下越新聞（昭和五四年四月五日）からの引用だ

昭和54年4月5日　下越新聞（毎月）

長崎氏は大正六年、時の十全村村長高岡忠郎氏に招かれて、当時中蒲原郡役所の官席書記をしており、人物を見込まれての選任で、一小農村の助役となり、昭和二十年の第二次大戦の激動期を勤めあげ、敗戦という最混乱期に退官した。

助役在任は実に三十年の永きに達し、この間十全村は高岡忠郎村長から田場八太郎氏、高岡忠興氏、神保人物氏、高岡忠弘氏と変ったが、今日的政治的習方からすれば、村長が次々と変って、助役のみ変らないという事に不思議な感を抱くこと、思うが、同じ十全村で、大正八年に書記として奉職した田場久三郎氏は大正十五年に収入役に就任し、長崎氏同様誠実で聞えた人だけに昭和二十三年まで勤めたのだから、長崎、田場氏倆に余程人望があり誠実篤行の士だったのであろう。

田場久三郎氏は今日でも長崎さんの部役所の官席書記時代に高岡忠郎さんが、その仕事振りと、人柄に惚れて十全村に招いたもので、高岡忠郎さんは体も大く、見識もあって立派な仕事をした人だった。そんな人だっただけに長崎氏の人物を見抜き、十全に引張ったものだ。長崎さんは助役時代に、県庁官など来ての会議など、陰膳据などになると、係官が長崎氏に聞きながらやったものであった。とも謂っており、村役大火の際、火事見舞いに所町の家に見舞いに行った際、その時の礼状だと、長崎氏の筆蹟を大事に今日まで保存している程で、その他長崎氏を知る人達から聞いた官歴は、誠実、温和、仕事の出来る人という答えのみで、真の人格者であっに招いた経緯について、当時の村長高岡忠郎氏に義兄会関係の用務でお体をしたという滝沢喜太郎さん（七五才）は、

長崎さんの部役所の官席書記時代に高岡忠郎さん

が、恐らく武おじいさんか、その弟の浩叔父さんからの聞き書きであろう。

会津八一が二年ほどで上京するに及び、それまで何度か笈を負って果たしえなかった上京をきっぱりとあきらめ、一九一七年（大正六年）旧十全村役場助役に転じてからは、村の「生き字引」に徹して一生を全うしたんだね。

この一九一七年には例のロシヤ革命が起こっている。世界で初めて労働者、農民の国、社会主義国が誕生した反響は、越後の片田舎村松、十全をも揺るがしたに違いない。

果たして信吉おじいさんが読んだものかどうか判らないが、お父さん（明）が

幸徳秋水著

社會主義神髓

朝報社發行

自序

「社会主義とは何ぞ」是れ我国人の殆んど知らんと欲する所なるに拘らず国として又官に知らざる可らざる所に因り、予は我国に於ける社会主義者の一人として之れを知らしむるの責任あるを感ずるが故に此書を作れり。

近時社会主義に関する著作多き中の手に成る！

幸徳秋水著

社會主義神髓　目次

第一章　緒論

○クロポトキンと言ふと云ふ人あれ、ソレントと言ふと云ふ人あれ、ベスベルと言ふと云ふ人あれ、思ふに今日に於ては世界に於ては我国に於ては社会主義者の名を聞くすなわち社会主義者なるものは、予は

学生の頃、まだ太平洋戦争の真最中だったけど、たまたま村松の家の古い小屋の屋根裏部屋を掃除していたところ、幸徳秋水著「社会主義神髄」東京朝報社、明治三六年七月二五日再版発行が見付かって、びっくりしたことがある。

勿論、お父さんだって、「社会主義」を知ってたわけではないが、東京大学農学部に在学していたので、近藤康男さんという有名な農業経済学の教授が教壇を追われたという話を小耳に挟んで、怖いもの見たさに、同教授の「日本農業経済論」を、本郷の古本屋で探し出して、密かに読みふけったりしていた。同教授の「農業簿記学」も手に入れたが、これはさすがに農業土木学科学生の私には直接的に役立つことが少なかった。この他に、吉岡金市氏の「日本農業の機械化」も読んで見た。

そういう密かな、私一人の読書の世界の中で、何となく当時の世の中では異端視される物の考え方があることに気が付いていた。そして、それが「アカ」というものらしいと知り、遠ざけたい反面、もっと知りたいという葛藤に心穏かならぬものがあった。

裏の小屋の薄明りで「社会主義神髄」を手にした私は、「見てはならぬものを見た」とばかり、開けても見ずに書棚の奥に返した。再び接したのは、それから一〇年ほど後のことになるが、そのことにはここでは触れない。

表紙が取れかかって、ヨレヨレになっているところから見て、誰れかが繰り返し読んだのは間違いない。信吉おじいさんか、武おじいさんか、浩叔父さんか。私は、瞬間、信吉おじいさんに違いないと判断し、今でもそれを信じているが、そのことを、まだ誰にもたずねてみたことがない。

信吉おじいさんは多分そういう人だったから、長男が若くして身分の違う人と恋愛し、結婚したいということになっても、何にも言わなかったのだろうと、勝手に信じている。その方がロマンがあるものね。

「成程、判った。だから長崎家は代々恋愛結婚なんだね」

と、次男伸夫がしたり顔で口を開いた。そういう自身も一昨年熱愛の彼女と結婚し、この五月に父親になる予定。

そういえば、私も、私の兄弟も、長男も長女も、それぞれに自分で相手を見付けており、お見合いの経験さえ持たない。「自分のことは自分が責任を持つ」という家風が、いつの間にか出来たようだ。

台湾渡航への憶い

康子が首をかしげながら言った。

「そんな大恋愛をして、親も結婚を認めてくれたのに、どうして台湾に渡る決心をしたんだろう」

そこで、私が答えた。

「武おじいさんに聞こうと思いながら、やはり思い留まって現在に至っている。お父さんなりにいろんな理由を考えてみたが、それをしゃべる前に、次の表を見て貰おう。

この表は、武おじいさんの喜寿祝（一九八〇年）の時、真人おじさんの発案で、長崎家の歴史を書き残そうということになり、おじいさん自身が書いたものの一部なんだけど、要するに、この五年間、とりわけ渡台直前の一年間に、何か見出せないか」

そこへ雅江おばあちゃんが夕食の支度ができたことを告げに来た。

「じゃあ、この続きは夕食後ということにしよう」

（ながさき　あきら＝にいがた県民教育研究所会長）

長崎武のあゆみ抄

西暦	月日	事項
1921	12/25	試験検定により小学校本科正教員の免許を受く
	12/31	曽野木小学校代用教員
1922	3/31	村松小学校訓導
1923	1/31	山本ノフと結婚
		徴兵検査 丙種合格 として兵役免除
	8/31	川原小学校訓導
	10/30	長男 明 誕生 （以後村中小学校在職）
1924	5/5	下新小学校訓導
		同校に授業研究の手腕を発揮 自由教育講習会を開き 県下に未だ革新的自由教育の実行に努む
1925	1/18	長女 悠 誕生 （月城在職）
	3/31	南蒲原郡長沢小学校訓導
		母の従弟にあたる 細野英三氏が若くして台湾にわたり教頭となりたるため 帰郷中同氏より台湾の気候風土教育事情等につき話を聞き心を動かされ 父母を説得して渡台の決心をする
	5/1	台湾公学校乙種教員の免許取得
	5/15	神戸より金戸丸に乗船 基隆港に上陸 台湾への第一歩を印し 乳飲子二人を抱えての台湾での生活が始まる。
	6/16	基隆郡四脚亭公学校訓導